

『歴史との関連における教育』の “終章〔アーノルド・J. トインビー執筆〕”の翻訳

曾 我 部 学

Arnold J. Toynbee, “Conclusions (Ch. 17),”
in *Education in the Perspective of History* by
Edward D. Myers

(Harper & Brothers Publishers, 1960), trans.

Manabu Sogabe

教育は、人間独自の活動である。人間は他の動物と異なって、肉体的、精神的な遺伝によって自然に自己に伝えられるよりも一層多くのものを受け継ぐ。人間は文化を継承するが、それも青年層が自然の生得権として取得するのでなく、先輩たちから勧誘されることによってわが物とするのである。人間の文化は、人間精神の中に先天的に組み込まれているのではない。文化は精神的な道具であって、人間精神によって伝達され、保持され、運用されるのであり、それは取りはずしができ、またすぐ替えができるのだ。我々の精神は道具の柄のようなものであって、これに当てはまる文化体系は一つだけではない。我々の文化は、我々の肉体や精神の構造によく似ていて、伝達しているうちに変化するので。しかしその変化の速度は、自然の変化の速度とは比較にならないほど速い。関係者全員の態度が保守的である時においてさえも、文化を伝達する世代は、その文化遺産を祖先から自分たちが受け取ったのと全く同じ形態では次世代に伝えることは決してできない。そして、人類の存続期間と比べれば、一世代の長さは微々たるものである。

今日まで、大抵の時と所における大抵の人間社会において、文化遺産の伝達という広い意味の教育は、自意識に捕われない、非組織的な活動であった。人々は祖先の文化を主として母国語を学ぶときの方法で身につけてきた。人々は先輩と交わり、無意識的に彼等から学ぶ。一方、先輩の方が教師たることをそれ以上に意識するということが殆どない。

このような自然のままの素朴な教育形態は、組織的な正規の教育が設立されるに至った、文明が発達中の社会においてさえも、重要な役割を演じ続ける。書物による学習を表看板にする教育

機関においてさえも、習慣の形成と品性の陶冶は、青年とその年長者との間の社会生活関係の自然な影響力の發揮に、今日なおも大幅に委ねられている。そして、子供が家庭から身につけて来るものは、恐らく、学校で計画的に教え込まれるものと同様に重要であろう。少数特権階級の専有物であった教育制度がより広く公衆に門戸を開放される時、家庭の寄与の重要性が明るみに出るのである。これまで存在した最も著しい特権の一つは、特権なき大多数の者に得ることが出来るよりも一層豊かな文化遺産を受け継ぐことができる特権であった。そしてこのより豊かな文化遺産は小、中、高等学校や大学を通してのみならず、家庭によっても伝達されるのである。このことは、より貧弱な文化遺産をしか持たない家庭の子供たちが少数派の学校へ入学を許可される時に明瞭になる。そのような子供たちは、正規の教育の同一の課程から学びながら、特権を持った家庭の学友たちと同程度の恩恵に浴することは困難であるのを知る。というのは、前者が家庭で身につけて来るものは、より少ないからである。「持てる者は与えられる」のだ。(訳者注:「おおよそ、持っている人は与えられて、いよいよ豊かになるが、……」《「マタイによる福音書」13:12》)これは公正なことではない。しかし、それは人生の現実の一つだ。より大きな特権を持つ社会階級に仲間入りしたある家族が、仲間入りできた階級の文化遺産を完全に物にするには一世代以上の時間を要する。

ある社会は、その時間と精力が食物とその他の主な生活必需品の生産に完全に奪われてしまうということのない少数派——どんなに少数であっても——を維持することができるようになるや否や、文明化の段階に入る。この余暇を持った少数派は、より古い時代の人たちの生活法における一種の非組織的で非自己意識的な見習修業が組織的で自己意識的な種類の教育によってますます補われるようになる社会環境なのである。このような教育が、我々が今日我々の社会で“education”(教育)という語を用いる時に普通意味するものだ。文明に附随するものの一つである教育のこの発展は、“civilization”(文明化)という語が含意するように、文化遺産を富ませることを可能にするものである。しかし正規の教育の創始によって、幾つかの厄介な結果が生じる。

一つの結果は、教育が人間精神に対する重荷になることだ。我々は教育を正規のものにしていくうちに、教育の量を累積的なものにする。連続する世代の連続する文化的業績が記録され、残されるが、他方、一人の人間が一生の間に学びとる能力は、おのずから一定限度内にとどまる。限界のある人間精神はいかにして、永久に大量に増え続ける文化遺産に対処すべきであろうか。人々が組織的な調査・研究によって人間の知識の範囲を積極的に拡大し始める時に、この問題は更に深刻になる。増大する文化遺産の内容を貧弱なものにするという犠牲を払ってでも、単純化することによって修得を容易にしようとする衝動が生じるであろう。教育上の目的のために、文化は月並な形態に変えられるかもしれない。そこでは、それは人間味のない、宗教的な高邁さのない、そして具体性を失ったものになりがちだ。そしてこの過程において、文化の生きた本質がこれを捕えようとする教育の網の目からすべり抜けてしまうかもしれない。一生にわたる見習修業というものが、授業計画表によって定められた教育課程によって排除されることになるかもし

れない。人生の次々に訪れる各段階への加入儀式たる試練が、月並な知識の中から勝手気儘に選ばれ集められた断片群を試験されるということになり劣るかもしれない。

教育を正規化するもう一つの結果は、教育を秘伝的なものにすることである。宗教的なものであれ、非宗教的なものであれ、詩が記憶又は記録に委ねられることによって連続する幾世代もの間保護され続けると、その芸術作品は、それが伝達される言語を「凍結」してしまう。人間のあらゆる文化的手段の中で、現用語が恐らく最も急速に変化するものであろう。現用語は古典となった作品の言語から速やかに別れる。そして古典語はやがて古語になり、そしてついには、その研究に専念できる暇のある人以外には理解できないものになる。今日なお高い文化的名声を持つが、同時に学問をする少数派以外のすべての人にとっては「死語」となっている言語に精通すると、この少数派に権威を伴う独占権が与えられ、それ故に独占権自体のために重んぜられ、愛着されるようになるかもしれない。

このことは、古典文学の伝達がまだ口頭による時でさえ起るかもしれない。歴史の示すところによれば、人間の自然な記憶力がまだ記録に頼ることによって弱まっていない社会では、多数の文学作品が、文字の助けを借りないで記憶によって、何世紀もの間、元の言葉に極めて忠実に伝達されることができる。そして実際、多くの社会は、文字を書く技術を取得した後も長い間、社会的、文化的に価値があると考えられるものを書き留めることに根強い偏見をいじめてきた。例えば法律がそうだし、典礼文は尚更のことである。筆記は、普通、まず第一に、在庫品や契約や通信文を書き留めるような、平凡な、実地的な目的のために用いられるようになったようだ。人々が文字をより高度な文化的目的のために使おうと思うようになるには、まず、文字が充実し、なじまなければならない。

最も初期の字体は、最も不格好で、最も複雑で、それ故、読み書きを習うことが最も困難であった。だから、古典語を理解する筆写者の独占が古くからある文字を用いて書く独占によって強められるとき、筆写者は、彼の特権的地位において二重に守られ、彼自身の時代の民衆の話し言葉が容易にマスターできる方法で表わされて文書に用いられることに反対する既得権を得る。

エジプトの象形文字、シュメール語の楔形文字^{くさびがた もじ}、とりわけ莫大な数の漢字は、文字を誤用して、文字言語を意思伝達の径路としないでかえって障壁とすることによって、文字言語の技術の目的をくつがえした例である。このような理由で、アルファベットの発明は、教育の歴史の一転換点となった——もしも我々がこの歴史を、自発的であるのみならず正規的でもある教育を少数派の特権であるがままにしておかないで、すべての人々の基本的権利の一つとする努力の歴史として考えるならば。しかしながら、アルファベットの発明に寄与した未知の天才によって人間の話し言葉の音をその基本的要素に分析する原理が発見されて以来の3千年間に、この原理が完全に合理的に応用されたことは一度もなかった。現存するあらゆる形式のアルファベットは、依然としてむだな文字を持ち続けている。と言うのは、それらは重複文字であったり合成文字であったり

する。そしてこのようなアルファベットの形式があてがわれてきた言語において存在する音のあるものを伝えるのに必要な文字を欠いている。

筆写者の独占権が種々な動機から次々と侵害されていった。例えば、一つのまとまった文明の全領域、否、恐らくはそれ以上に渡る広大な帝国の政府は、必要とする行政官で帝国政府を満たすのには、従来の少数特権者では不十分、又は不適當であることに気づくことになるであろう。するとこのような政府は、その行政階層制度の各地位を満たし、又は補充するために、教育を受けた人々の新しい階級を計画的につくり出すことになるであろう。中国では、紀元前2世紀と1世紀の変り目に、帝国政府は儒家と提携したが、儒家の必要書籍は孔子が正典として認めた古典であった。その結果、中国では知識階級が相当広がり、それに伴ってこの階級の社会的基盤も拡大された。異質の文化に転換させられたか、又は異質の文化を招来した帝国政府によって、全く新しい「知識階級」が生み出されることがある。このようなことが、ピョートル大帝の治世以後のロシアでの西欧文化の「受け入れ」の結果や、英国の統治によるインドへの西欧文化の導入の結果の一つとして生じたことであった。

布教する宗教もまた、地の果てまで伝道しようとする熱意かられて、教育を受けた聖職者たちの新しい集団を生み出した。そして彼等の指導者たちは全人類が回心者になることを希求したのであるが、恐らく彼等が世界で普通教育を最初に思いついた人たちであろう。特に中国では、印刷術と紙の発明は、悟道を一般大衆にも手が届くものにしようとする仏教の布教師たちの熱意によって促されたように思われる。

普通教育のこのヴィジョンは、それを理想から現実に転移させるための経済的手段が与えられるまでは、高等宗教によっていだかれていた。文明の歴史のこの最初の5千年間において、この新しい生活法の最も特徴的で最も好ましくない点の一つは、文明が発達中の社会の構成員の少数派がその物質的並びに精神的な恩沢を独占することであった。文明の最初の段階における文明のこの不名誉は、少数支配者階級の利己主義のみによるものではなかった。たとえこの集団の全構成員が人間の自然な自己中心癖を超越できて、人類同胞の特権なき大多数の人たちと文化遺産を分かち合うことを全力をあげて試みたとしても、産業革命以前には、基本的な経済的要求を満たした後に手元に残る経済的余剰が殆んどないために、彼等は失敗したことであった。この革命は、西欧社会で約2百年前に始まった。そしてそれ以来、勢いを増して来て、西欧の諸国民から世界の他の国民へと伝わって来たのだ。

人間や動物の筋力が機械力によって補強されていなかった工業経済以前の農業経済においては、社会の構成員は少数派を除いてすべてが小作人として生活するように運命づけられるが、彼等の微少な生産では、少数派以外の人々に対して衣食住のような通常の必要物を越えた特典を与えることはできない。この不公平は、高等宗教の出現によって耐えがたいものになった。高等宗教は、各人はたまたま生れながらにして置かれた社会的階級にかかわりなく、無限の精神的価値を持つ

ものであることを預言し、揚言したからである。それ以来長い間耐えがたいものであった不公平は、産業革命によって今や存在の必要性がなくなった。と言うのは、産業革命は、ついに人類全体に対して文明の恩沢を与えることを我々の経済力で可能なものにしたのである。但し、常にその前提条件になっていることは、我々は科学技術の進歩によって生み出された新しい力を人類の自滅のために使わないということである。

勿論、我々のこの産業革命は、長く連続する科学技術の進歩の中の一つにすぎない。しかし、それは恐らく、農業の発明以来、それを遂行した社会の全員に対してかなり大きな社会的、文化的利益を与えることができるほど強力であった最初のものであろう。文明の黎明期において、水の自由な利用の考案により、西南アジア及びエジプトの大河の流域で、農業生産高が増大した。紀元前7世紀及び6世紀のギリシアにおいて、主要食糧や原料と交換取引をするための高級作物の生産の専門化の案出によって収穫物の質が上昇した。水の自由な利用と農業生産における専門化もまた、目覚ましい経済上の大変革であったが、それらは実質的な効果においては、比較的小さな変革であった。我々の最近の産業革命は、世界のおびただしい数の小作農の生活水準を、「肥沃な三日月地帯」周辺での文明の発祥に先立つ時代に、そこで達せられた新石器時代のレベルを越えて引き上げるための、実質的な手段の可能性を切り開いた最初のものであった。文明の恩恵を人類の大多数の特権なき者全部にもたらすこの現在の可能性は、今やついに我々の力のできるものになった、公正の行為を実行せよという道義的命令を伴うものである。これは人類が、そして必然的に古くから存在する人間の教育制度が、今日直面している新しい要求である。この要求に伴って生じる教育の諸問題は、この要求自体と同程度に重要なものである。

一つの問題は一人の人間の能力は厳しく制限されているという変更不能で避けられない事実によって、提起されている。人が一生にわたって実質的に最大限に発揮し得る生れつきの能力と精力の最大限のものも、最低の可変性しか許されない非常に狭い範囲内に固定されている。他方において、科学と科学技術において、人間の知識は累積していく。人文科学においても、特定の文明や高等宗教の存続期間内において知識は累積する傾向があり、時には、人文科学的文化のこれらの社会的母体が崩壊し消滅した後までも存続する。文化のこの累積は、正規の教育を受ける者をも受ける者をも、果てしもなく増大していく困難という、とてもできそうもない骨折り仕事に直面させる。そしてこの困難は、あらゆる文明社会とあらゆる社会階級にいるすべての個人に、等しく立ちはだかる。

近代になって、西欧文明は、知識の範囲を計画的、組織的に広げることにおいて、そして人間外の自然についてのその知識を、人間を取り巻く環境に対する人間の支配力を増大するという実質的な目的に応用することにおいて、甚だしく成功してきた。これらの成功の達成に用いられた工夫の一つは、研究の専門化であった。それから、専門化が我々のために獲得した圧倒的に大量の新知识に対処するための可能な方法として、専門化を更に徹底して進めていこうとする誘惑が

ある。現在この誘惑は、政府や政府外の社団法人や財団法人が自然科学及び応用科学の専門家を新しく必要としていることによって一層強められている。と言うのも今は、国際的な権力政治の場において、技術的、科学的知識が軍事的卓越や行政の手腕よりも重要になることが予期されるからだ。

いかなる国家又は国民でも、この誘惑に屈するものは、自己本来の目的をくつがえすことになりかねないと思われる。現代の、科学と科学技術の結合は、多くの成果をもたらしている。と言うのは、科学は、それが発見したものを実用に移すことを直接には何ら考えないで、主としてそれ自らの目的に従事されてきたからだ。それから、科学の純粋な追求であっても、もしもそれが狭い分野にだけ閉じこもってきまりきった方法で行われるならば、実を結ばなくなる。自然科学の特定の部門における専門化は、もしもそれが包括的、哲学的な、科学的思考という根源から切り離されるなら、やがて枯渇してしまう。更に、人間外の自然全体を自己の視野にとり入れる科学者でさえも、人間性をそれから除外するわけにはいかない。「人間にとって適切な研究対象は人間である」(訳者注：アレグザンダー・ポープ『人間論』Ⅱ，1-2)。なぜならば、人間の、自己との、そして隣人たちとの関係は、人間が人間の務めのうちで、これまで著しく失敗してきた部分である。そして、自然科学の進歩によって人間が強情に自己に背いて振るうことができる、人間外の自然に対する支配力が大きくなればなるほど、対人間面での失敗に対する報いは一層大きくなる。自然科学及び応用科学の教育と人文科学の教育とのバランスをとる必要性が、例えば今日の最もすぐれた教育機関の一つであるマサチューセッツ工科大学で認識され、実行されている。そしてこの広い視野の方策の賢明さが教育界で認識されてきている。このことは、応用科学と自然科学の様々な分野での極度の専門化を唱道する人たちによって注目され、深く考慮されるべきだ。彼等は、この専門化が、国家間の勢力争いで優位を占める鍵であると考えているのである。

一方、自然科学においてばかりでなく、人文科学においても、莫大な知識の量は計り知れないものになった。過去において互いに異なった文明社会の人たちが多少とも互いに孤立して生活していたときには、人文科学の教育は、ある一つの文明の「古典の」言語、文学及び哲学の修得だけを要求した。例えば、東アジアの諸国民にとっては中国の古典の修得であり、西洋の諸国民にとってはギリシア・ラテンの古典の修得であった。しかしながら、現代西欧文明が世界の他の地域の人たちに衝撃を与えて以来、他の文明圏の人たちは、自分たち自身の伝統的な文化の修得では、もはや自己の立場を保持するのに十分でないということを認識してきたのである。もしも彼等が「現代生活の多大な努力を要する状況の下で」(国際連盟規約からの言葉を引用すれば)生き延びようとするならば、彼等は今や西欧世界について何かを学ばねばならないのだ。新知識は、西欧人に他の諸国民に対する一時的優越を与えたのである。ところが、西欧の圧力の下にありながら、非西欧諸国民は、一方では人文科学における彼等の教育の伝統的な範囲を拡大しながら、西欧人たちをいつの間にか追い越そうとしているのだ。そこで今度は西欧人の方が、負うた子に

道を教わらなければならない、ということになるだろう。と言うのは、我々が生きている現在において、西欧は最近得た優越を失いつつあるのを我々は目撃している。つまり、非西欧諸国の国民が次々と西欧の科学技術的・科学的ノウハウを習得し、それによって世界における非西欧諸国の正常な地位——現代の西欧が世界をあっと驚かすことによって世界を魅了したときに一時的に失われた地位——を再び取り戻そうとしつつあるのである。

西欧の知識についての、非西欧諸国民の独学は、力の回復のための手段としては、さしあたっては成果をあげているかもしれない。しかしそれは、彼等の先祖伝来の人文科学における彼等の伝統的な教育と比べれば表面的な知識であり、この新知識は深められるのであれば、古い知識との交換物としては割に合わないことが分るようになるであろう。典型的な西欧化された——或いは現代化された、と言う方を彼は好むかもしれないが——今日の非西欧人は、何か現代的な西欧的知的職業——例えば医業や工業技術職——に従事する資格を身につけており、しかもその知的職業をどこか西欧の言語で学んでいる。しかし彼は、ギリシアやラテンの古典を恐らく知らないであろう。ところがそれらの古典は、現代西欧の非宗教的な文化の源である。彼はまた、キリスト教について恐らく知らないであろうが、キリスト教は、不可知論や無神論の西欧人の道徳的信念のみならず、精神的見解の源でもある。そういうわけで、非西欧人の西欧文明への転向者は、自分自身が持っていた先祖伝来の文化遺産を捨ててしまい、しかも西欧における古くからの文化遺産を修得することもない、ということになるであろう。しかし世界の諸国民は、もしもその注意を生活の現在的な表面にのみ限定して歴史的な深みを見無視するならば、互いに理解するようになることはできない。我々は、一人の人でも、一国民でも、一文明でも、或いは一宗教でも、その歴史についてある程度のことを知らなければ、本当に知っているとは言えない。それで、ここにおいて更にもう一つのルートから、我々は、我々の知識の量の過度の増加によって生み出される問題に、再び直面させられることになる。

今日、過去についての我々の知識は、空前の割合で増加している。そしてこのことは、その知識の絶えず延びていく展望の両端において生じる。考古学者たちは、政治家たちが現代史学者の研究対象になる新しい行動をとることによって歴史を作りつつあるのと同じくらい速く、埋もれて忘れられていた文明を発掘することによって、歴史を作っている。6年足らず続いた第二次世界大戦中、連合王国で作られた公の記録は、それ以前に連合王国及びその合同前の国家——イングランド王国とスコットランド王国——によって作られた記録の残存するものすべてに、量において匹敵すると言われている。戦時中のロンドンの政府のたった一つの局の記録文書は、もしもファイルを立ててできるだけぎっしりと一列に並べるなら、17マイルにわたるであろうと言われている。考古学上の発掘物の記録もまた恐ろしく大量であり、そして両者の間にあって、文明と宗教の歴史の比較的よく知られている時代に関する我々の知識も増加してきており、その過程において、以前によく分らなかったか無視されていた文書の研究により、更に、以前によく知られ

ていた文書の再解釈により、この知識は変化してきている。

さて話変って、経済学は、人間の活動の以前に無視されていた一面の研究を始めた。人類学と社会学は、人間社会の構造とあらゆる段階——最も原始的なものから最も文明化されたものまで——における人間の文化の性質の研究を始めた。そして心理学は、人間性の研究に新しい一面を加えた。認識論、論理学及び倫理学というギリシアの学問は、人間の精神の合理的並びに合目的な面を探究したが、心理学は不合理な、感情的な深みを探っている。そしてここにおいても再び、探求を続けている人間精神は、無限なものに直面したことに気づくのである。もしも有能な心理学者が、たった一人の人のプシケの中で最短の時間内で起こるすべてのプシケ事象を、しかも最も精巧な記録計器が計ることのできるそれを、徹底的に記録しようとしたならば、(ヨハネによる福音書からの一節を借りて述べるなら)「世界もその書かれた文書を収めきれないであろう」(訳者注：「ヨハネによる福音書」21：25)。

人間及び人間以外の環境についてのこの計り知れない、増大していく知識の集合体は、それに触れる人間精神に脅威を与え、守勢をとらせる。我々は自衛のために、再び自問したくなる——我々の正規の教育機関がこの恐るべき重荷の大部分をあっさりと拒絶できないものか、或いは、せめても、だれの背骨をも折る危険を冒すことなしに、別々の人々の肩に分配できる荷物になるように、それを分割することができないものか、と。この嘆きに対する答は、否定的にならざるをえない——「私は人間だ。だから、人間生活と人間性に関係する何にでも無関心ではいられない」(訳者注：ローマの喜劇作家テレンティウス『自責』より)。今日生存している人間は、男も女も子供もすべてが、人類が一族として共存するようになるか、それとも、地球的規模で大量虐殺を行うか、という終局的な選択に直面している世界に生活しているのだ。人類も、生存しているそのいかなる一員も、この人間の状況を無視することはできない。もしも我々が自滅すべきでないなら、我々はそれに対処せねばならない。それに対処するためには、それを理解しなければならない。そしてそれを理解しようとするとき、我々の各人はみんな、少なくとも知識の三つの広大な分野をある程度心得なければならなくなる。その知識とは、人間以外の自然に関する知識と人間性に関する知識と特定の場所で一時的に続いた文化——比較的原始的なものもあれば、比較的高度なものもある——の特性と歴史についての知識であり、この文化は、人類の人間以前の祖先たちが人間になって以来、時代が経過する中で人類が創造し、伝え残し、改変し、捨てたものである。正規の教育の最小限度の仕事も、このようにして今日、大仕事になったのだ。そしてすべての子供は、この新世界の有能な市民に成長するために、不正規・正規の教育の非常な努力を要するコースを終了しなければならないであろう。

それでは、我々の教育機関は、いかにしてこの圧倒的に大量の知識の遺産を微小ではかない人間精神に伝達すべきであろうか。この伝達の仕事は、たとえ我々がその仕事を特権を与えられた、西欧の文化的伝統の継承者たちの教育に限定することができたとしても、脅威的な仕事であろう。

もしもだれかがいるとするなら、これらの継承者たちこそ、この包括的な性質の教育を受容できるであろう。と言うのは、現在全人類が住んでいる全世界的社会機構を生み出したのは彼等だからである。この社会機構は、西欧的な機構として出発した。(もっとも、恐らくはそれは、非常に異なったものになっていくであろうが)。そして西欧社会の特権を持った少数派は、その社会機構に現在のような形態を与えるのに主要な役割を果たした。このようなわけで、だれがとって彼等こそ、その中でくつろいでいるはずだ。しかし今日、この恵まれた少数派をさえ、それ自身の遺産であるものに対処できるように教育することは、何とむずかしいことか。そして我々がこの範囲の限られた教育問題についてさえ解決の見通しが見つからないうちに、我々は、西欧人の特権なき多数派の教育と人類の大半をしめる莫大な数の非西欧世界の人々——彼等にとっては、彼等の生活の現在の西欧的な枠組は、何か異質の、肌が合わないものであるが——の教育という、更にもっと困難な問題に深くかかわっていかなければならない。疑いもなく、この教育の仕事は、途方もなく大きな仕事である。しかしながら、我々は、この仕事から手を引いたり、又は人類のいかなる部分をもその仕事の範囲から除外するわけにはいかない。我々は、人類が自滅する危険性がなくなるように修養する手助けをしなければならない。そしてこれは、我々が拒否することのできない義務である。

このような特質を持ち、幾分このような大きささえ持った教育の仕事が、人類の大部分の運命について責任があると気づいた人々に直面したのは、これが最初ではない。なるほどこの数世紀の間に西欧のイニシアチブによってこの仕事がなしとげられるまでは、地球上のあらゆる居住可能な地域にいる人類全体が単一の全世界的な社会に統一されたことはなかった。それにもかかわらず、過去において、真に世界的とまではいかないが、関係する人々にとっては世界的と思えるほど大きな規模を持った統一があった。今から1900年前に、中国帝国は、中国帝国の住民にとって、そしてローマ帝国は、ローマ帝国の住民にとって、事実上文明世界の全体を包含しているように思われた。両方の社会集団はそれぞれ、自己の姿を間違っって思い描いていた——このことは、これら二つの「世界的な」帝国が同一の大陸の両端において、互いによって殆んど知られることなく、同時に存在していたという、単なるこの事実によって証明されるのである。それにもかかわらず、我々のこれらの先人たちが亜大陸的規模での統一の結果として出くわした教育問題は、我々の注目に値するほど十分に、今日の我々自身の真に全世界的な問題に似ているのである。次の一部の前例をざっと見てみれば、たとえそれが我々が追求しなければならない積極的な教育方策にそれほど多くの解明の光を投げかけてくれないにしても、恐らく少なくとも我々が避けて通らねばならない陥りやすい過ちのいくつかについて警告を与えてくれる。

ローマ帝国においてのみならず、中国帝国の最初の時期である秦と漢の王朝において、正規の教育の行われる範囲を、以前に独占していた特権を持つ少数派からもっと広い範囲に拡大しようとする試みがあった。しかし両方の場合において、「世界的な」帝国の全住民に一族として永久に共存する仕方を教えることができなかったという意味で失敗した。両帝国は崩壊した(もっとも、

両者ともに、皇帝の空位期間の後に一時的には再統一された)。両者の場合において、教育の分野内で、失敗の二つの同じ理由が認められる——勿論、これらの理由は、起こったことの説明の一部にすぎないが。

一つの理由は、以前の特権を持った少数派の伝統的な教育方式は、普及される過程において質が低下した。それは自発的な、一生にわたる見習修業から分離して、本の学習による正規の教育へと退歩した。伝統的な文化を完全に伝授されるという試練が、古典の文献から任意に選ばれ、正典と認められた集成に精通すればよいということになった。そしてこの精通のテストは、オリジナルなものを模倣する能力ということになった。実際、言葉を巧みに繰る技術が生活術の代りに用いられたのである。

失敗の第二の理由は、正規の教育の範囲が両者の場合において、人文科学に限定されていたことであった。「古典」時代のギリシア人も中国人も、人類の科学技術的な知識・技能を増やしたのであり、そしてギリシア人はまた、純粋数学と自然科学（生物学を除いたもの）の発見における先駆者であったのだが、「有用な学科」に対する貴族的な偏見が、どちらの社会においても、貴族制度が終ってもなお存在し続けた。従って、どちらの社会においても、経済を純農業レベルよりも上に高めようとする努力は一切行われなかった。実のところ、東アジアにおいては、それまでも、経済は常に純農業レベルであったし、また、ギリシア・ローマ世界では、B.C. 6世紀のギリシア及びB.C. 2世紀のイタリアにおける農業革命の成果が、北西アフリカ及び地中海のヨーロッパ沿岸背域の広大な経済的後進地域がギリシア・ローマ世界に統合されることによって相殺されたときに、再び純農業レベルに引き下げられたのであった。同様な貴族的な偏見が、近代西欧世界において17世紀及びそれ以後に、あのように多大な成果をあげて頂点に達した科学と科学技術とのあの合体を、ギリシア人が行うことを妨げたのであった。ギリシア・ローマ世界と東アジアの両方において、その結果は、増大した知識階級が、その生産力がこの追加された“荷物”を運ぶために上昇してはいない小作農に寄生する生活をするようになった。そして小作農の社会的な重荷のこの増加は、小作農が認めることのできるいかなる文化的な恩恵によっても償われることがなかった。特権を持った少数派の教育が変化させられていた月並みな書物による古典の学習は、小作農には得られないものであった。それに、もしも彼等に得られるものであったとしても、多分それは、彼等に魅力的なものではなかっただろう。このような事情だったので、両帝国の場合において、小作農が反乱を起こし、そして「世界的な」帝国とそういう形で具体化された文明が崩壊したのも驚くべきことではない。この歴史の中に、今日の我々のための教訓がある。

一つの教訓は、我々は数種の重要な教育の主題が互いにバランスを保つように努力せねばならない、ということだ。疑いもなく、すべての中で最も重要な主題は人間である。もしも各世代において、我々が我々の先輩たちから、我々の人間仲間との、そして自身自身との関係をうまくやっていくわずかの方法でも学ばないとしたら、人類は生き延びることができないであろう。こ

れが人文科学教育の真髄である。しかしそれは、本の形で「人文科学」を勉強することだけからでは学ぶことができない。なるほど今日の世界においては、相当な量の本による学習が、あらゆる人の必要な部分になってきている。しかし同時に人文科学教育の真髄は、依然として主に、あらゆる社会とあらゆる段階の社会階級の教育の核心である、非公式の見習修業によって得られなければならない。これこそ我々を人間らしくし、人間らしく保っているものである。「人文科学」における本による学習は、見習修業の価値ある補足にはなり得るが、その代りには決してなり得ない。そして自分の仲間たちと生活する方法についての見習修業は、この世に生をうけたあらゆる人間の教育の不可欠の要素であるのに対して、本によるその補足は、もともと政府機関の行政官や高等宗教の聖職者たちのための職業教育として生れたということが記憶されねばならない。これらは、二つの高度に専門化された職業である。そして「知的職業」の範囲は、現代における文明の増大する複雑さと並んで相当に増えたけれども、これらの職業は、人類のごくわずかの者以上に対して雇用を提供することは決してできそうもないし、又それらの職業にその適性を進んで求める意志と能力のある者も、ごく少数以上にいそうにない。

もしも我々が、人類全体に正規の書物中心の教育を、単に初等教育又は中等教育の段階までではなく、知的職業の一つの資格をとるために要求される水準まで受けるように強制しようとしたならば、我々は、高等教育のこの部門のより高い水準を、そこまで上がっていく特別の素質を持たない人々の能力内に引き下げざるを得なくなり、高等教育部門の高い水準を破壊することになるだろう。そして同時に、我々は人類の大部分を、いかなる種類のものであれ正規の教育の意図から締め出す危険を冒そうとしていることになるだろう。人間の才能は様々であり、そしてこの多様性は、社会にとって価値があるということを我々は認識しなければならない。生れつき「知識人」になる素質を持っている人たちは、人文科学に向いている人と自然科学に向いている人に分けられる。しかしどちらのタイプにせよ、「知識人」は、いずれの階級、社会、民族においても、どちらかといえばごく少数である。高等教育のどの方向に個人は進むべきかは、特権の問題ではなくて、個人の才能の問題であるはずだ。あらゆる人種、社会及び階級の大抵の人間は、生れつき実務的傾向を持っている。そしてこれらの人々は、より上級の教育段階に達するときに、もしも彼等の家族の社会的地位がたまたま何であるかに関係なく、書物中心の学習から技術見習に進路を変えるなら、彼等は最も楽な気持ちになれるであろう。

勿論このことは、正規の教育が軽視されるべきだとか、無視されるべきだとか、ということの意味しない。と言うのは、はなはだ異なった生活様式を受け継いでいる様々な国民が一族として生活する方法を早急に学ばねばならない世界において、科学技術、自然科学及び人文科学の領域において正規の教育が果たすべき明白な役目がある。我々の第一に必要なことは、互いに効果的に意思が通じ合うことだ。そして、依然として互いに理解できない言語の混乱状態である世界において、子供はすべて、将来の職業が何になろうと、母国語のほかに少なくとも一つの外国語を学ぶことを要求されてしかるべきである。これは過大な要求ではなく、事実、スイスでは、すべ

ての子供は今すでに、二つの外国語を習い覚えているし、オランダでは、当然のこととして三つの外国語を習得している。この外国語学習の動機は、オランダ人のような国民にとって最も大きい。と言うのは、彼等の母国語はたまたま世界語ではないので、もしも彼等が数か国語ができる努力をしなければ、広い世界でよそ者の思いをするであろう。英語を母国語として話す国民は、母国語としてたまたま世界語を用いることができるという有利な条件によって楽をしてかえって損をする傾向がある。

更にアメリカ人は、人類の他の人々を、アメリカ人的生活法をいかに実践するかを学ぶ務めがある潜在的入国移住者とみなす傾向があり、アメリカ人の考えるところによれば、他国民のこれに向かつての第一歩は英語を学ぶことである。しかしながら今日では、もしもアメリカがロシアとの世界規模の競争において、自己の地位を守り通そうとするならば、こんどはアメリカ人こそが、他の国民の立場に身を置き換えて外国語を学ばねばなくなっている。第二次世界大戦以来、アメリカ人の生活に一つの重要な新しい職務が出現した。今では何10万人というアメリカ人が、外国で、アメリカ合衆国政府のみならず、大きなアメリカの営利会社や文化財団の仕事に従事して働いている。英語を常用しない国で働いているこれらのアメリカ市民たちは、アメリカ人の伝統的な外国語学習嫌いによって不利な立場に追いこまれている。これに反してロシアは、ほとんどスイスやオランダの水準まで伝統的に外国語に熟達しているという有利な立場にある。そしてこのロシアの伝統は、1917年の革命直後一時衰退したものの、今では復活しているようである。あたかもロシア人は、意図せずして、アメリカ合衆国における外国語学習をアメリカの教育の主要素の一つにしようとする新しい運動の推進役になりそうにみえる。しかし、この方向での刺激を必要としているのは、英語使用国民のみではない。もしも存続しようとするならば今や「一つの世界」になるべき世界において、外国語の熟達度において今日最高水準にある国においてさえも、改善の余地がある。

しかし世界は、単に相互の意思伝達的手段を改善するだけでは、しんから「一つの世界」になることはできない。同一の共同体の中で、今日依然としてそうであるように、集団や階級によって文明の恩沢を不公平に割り当てられる限り、人がよりよく知り合うことが友愛ではなくて敵意をもたらすことが起こり得るのである。この不平等は、貧困の結果であった。そして貧困は、科学技術の遅れの結果であった。そしてこの遅れは、現代の科学技術と科学との結合によって克服されたのである。世界は、その自然科学に関心のある「知識人たち」と科学技術に関心のある大多数の人々に、物質生活の最低限度の水準を、全人類のためにこれまで思いもよらなかった程度にまで高めることを目ざして、協力して働くように教育する必要がある。今や我々は、原子エネルギーの開発方法を発見したのであるから、すべてのインドの小作農もやがては今日のイリノイ州の農業経営者と同様に裕福な生活をするようになってはいけないという理由はない。でも、この程度の物質的生活状態の上昇では、恐らくその小作農にとって全く満足だということは決して

言えないだろう。しかし、彼の現在の物質的生活の気の滅入るほどの低レベルを越えてかなり上昇することなしには、彼は人間の真の目的である精神的幸福を達成できないであろう。

科学技術の進歩が人類のために用意してくれる最大の恵みは、勿論物質的な富の蓄積ではない。一人の個人が一生涯に実際に楽しむことのできるこのような富の量は大きなものではない。しかし余暇の利用の可能性には、それと同様な狭い限界はない。余暇という賜物は、それを利用する経験のない人々によって誤って用いられるかもしれない。しかし、文明化の進行過程にある社会の余暇を持った少数派の中の少数派による余暇の創造的な利用は、原始的なレベルを越えるあらゆる人間の進歩の推進力になってきたのだ。我々の依然として旧式の産業社会においては、余暇は、特権をもつ少数派以外のすべての人々によって、収入を伴う労働の中での「失業」という否定的な見方で評価され続けている。そして産業労働者にとって、失業の予想は、今のところ悪夢である。なぜならそれは、収入の損失と更に悪いことに自尊心の喪失を伴うからである。我々の世界においては、失業した労働者は、まるで自分は労働する社会からの除け者であるかのように感じるのである。ギリシア人は、余暇の中に人間のすべての良きものの中でも最大のものを見出した点において、より正確に真実を洞察する力を持っていたのだ。そして実際に彼らは余暇を価値ある目的のために用いたのだ。——そのことは、余暇を表すギリシア語は、現代の西欧の国語の大部分に「学校」を表す単語を提供したという事実によって証明される。我々の世界において、オートメーションの黎明期は、やがてすべての産業労働者に、収入や自尊心や社会的評価を失わせることなく十分な余暇を与えることになるであろう。

多分、もしこの未曾有の余暇が突然無理に労働者の手に握られるなら、彼等は最初は、それについて一部分誤った用い方をするであろう。しかし遅かれ早かれ、我々は、正規の成人教育を受けるために余暇の幾分かを利用することができるようになるであろう。我々の人生における不正規の見習修業は、勿論一生続くものである。我々の人生経験は、いやおうなしに我々を教育する。しかし、この最初の2、3千年間の非常に貧乏な文明においては、特権を持つ少数派のためのものであっても、正規の教育は通例、せいぜい青年期の終りに終結した。そしてこのことは、不幸な結果をもたらした。学生は、自分がまだ本の学習を生かす経験をしていない人生の段階において、本の学習に飽きてしまったのである。しかも、それからもっと後の時期になってから、本の学習を渴望するようになったのだ。しかしもしも、後のこの時期になってから彼が本の学習の機会を与えられていたなら、彼の増大してくる経験に照らしてみながら、彼ははるかにもっと有意義にこの機会を利用できただろう、と思えるのである。未来の豊かな社会においては、我々はすべての男女に成人になってからのあらゆる段階に、定時制の成人教育を与える余裕ができるようになるであろう。既にデンマークでは、農業革命をなしとげた知性をもった高度に文明の発達した国民が、そのあまり多くない収益の一部を立派なデンマークの高等学校（子供たちのためではなく成人のための学校だが）で、自国民に、ギリシア流に任意の成人用高等教育を与えるために、用いているのである。デンマークの農民は、6か月又は12か月のコースを履習することがで

きるように何年も貯金をして、自分の経済状態をよくする目的ではなく、自分の教養レベルを高める目的で、面目にかけて科目を選択するのである。この今日のデンマークの制度の中に、「原子力の平和利用」、オートメーション、及び科学的に操作される豊富な機械力によって生じる余暇の、来たるべき時代に全人類に開かれる、教育の進歩の前触れを見るのだ。

しかし、あらゆる種類の教育の質は、教育を与える人の質によって左右される。そして、教育の正規の要素が重要性を増すにつれて質が低下するという、一見矛盾した傾向が生じた。実生活の自発的な見習修業は、大昔の人の知る唯一の教育形態であったが、これは共同社会の指導者たちによって与えられた。子供は両親から教育を受け、青年は共同体の聖職者や首長たちから教育を受けた。このような指導者たちの教育の職務は、彼等の他の活動から分離し区別することのできないものだった。それ故、指導者たちの仕事の持つ全体的な威信にあずかっていたのである。しかし、独立した正規の教育が生れると、その教育は、他の専門的職業の男女と同様に給料をもらって働く専門的職業の教師という新しい階級をつくり出す。そして文明の発達過程にあるこれまでの大抵の社会では、専門的職業の教師の給料と地位は、社会が正規の教育の価値に対して与えた空世辞^{からせじ}によって保証されたものよりも低かったのである。このことは、時として悪循環をつくり出した。と言うのは、教師の職業の意気消沈と不満によって、有能な人々がその職業に入るのを思いとどまり、そのことによってその職業の水準と地位が更に低下するようになり、意気消沈と不満が更にまた深まっていくことになったのだ。今日の西欧世界の教職の信望の低さは、ジョージ・バーナード・ショーの辛辣でうがった警句によって風刺された——「もしもあなたにできるなら、しなさい。もしできないのなら、教えなさい」。

西欧の世界においては、教職の地位は、国によってかなり異なるということは事実だ。オーストリアでは大学教授夫人は、以前は陸軍大佐夫人と同じ地位とみなされたが、プロシアでは彼女は、陸軍少佐夫人と同じ地位とみなされた。もしもだれかが、イングランドで教授夫人の格づけをしようとしていたとしたなら、彼女は多分、イングランドの陸軍大尉の夫人より決して高い地位にはならなかったであろう。ところがスコットランドでは、彼女はきっと陸軍少将夫人と同等の地位を占めたであろう。連合王国の大学教授の給料が、インフレの影響を減殺するために国庫補助金によって均等にされる前には、同じ仕事に対する給料を金持のイングランドが惜しんで控え国に払おうとしていたのに対して、貧乏なスコットランドの方が自国の教授により高額を支払っていたのである。現今では、イングランドの大学の教授がスコットランドの大学に赴任することになっても、もはやその収入が増えることはない。しかしその教授夫人は、彼女のわずかな購買力と全く不釣り合いにも、彼女のすばらしいひいきにあずかると考える店から、今なお大変な敬意を払われてひどく驚くのである。

スコットランドで大学教授の地位が依然として高い一つの理由は、恐らく、教会や聖職者が有力であった過去の余光をまだ浴びているからであろう。最近まで、あらゆるスコットランドの小

作農家の野心は、息子を長老派教会の聖職に送りこむことであった。この大変な企ては、甚大な努力と自己犠牲を要した。そして教授は、困難な道で大望を抱く学生を助けてやることによって、家族全体の感謝を受ける守り神であった。しかしながらこれは、この理由の説明のすべてにはなれない。と言うのは、教授の地位は、フランスとドイツにおいても比較的高く、そこにおいては教授は、半聖職者的な導師ではなくて、宗教に関係のない、普通の公務員である。そしてとにかく、現代の西欧世界では、教師の比較的高い地位のこれらの例は、例外的なものである。スコットランド以外の大抵の英語使用国では、教授の地位は比較的低いものに下げられてきているが、これが西欧世界全体のその地位を一層代表的に示している。

それでは、西欧の教職の地位と水準を上げるために、今日何をすることができるだろうか。ここにおいてもロシアは、西欧の観察者たちに、その教授を高位高官の士として待遇しているという印象を与えることによって、西欧に対して無意識的にもう一つ貢献しているかもしれない。この印象は正しかろうと正しくなかりと、恐らくアメリカを刺激して、アメリカは世界的強国を目ざしてのロシアとの競争における不可避の手段として、アメリカの教職の地位を高めることであろう。これは、教育改革のための考えられる限り最良の動機ではない。だが、それが確実に刺激となって、アメリカ国民を動かしアメリカの教師たちに給料と余暇の大幅な増加を与えるのであれば、その動機は歓迎すべきものだ。アメリカは、「原子力の平和利用」から期待できるあり余る豊かさを待つ必要もなく、もうすでに自国の教師たちに気前よくする余裕を持っている。

しかし、教職者の生活の物質的な条件の相当な改善は、それだけでは十分でないであろう。その改善は、教師に対する、社会のみならず教師自身の評価において、尊敬度を高める道を開くことのできる単なる一条件であろう。この評価は、もしも一般社会と同業者たちの両方が二つのことを確信しなければ高くなることができない——第一は、教職が価値ある公益奉仕を行っているということであり、第二は、教職がその仕事において高い専門職的水準を維持しているということである。次のことが実感されるならば、これら二つの条件の最初のは満たされるであろう。即ち、歴史の現在の重大な時期において、教職は人類が自滅を免れるように助力することに、正に果たすべき不可欠の役割を持っている——それには、人類が成長して、特権を持つ者たちと持たない者たちとの間の醜惡な因襲的な不和が完全に廃除される一族となることに役立たねばならぬ、ということである。ここは、語学の教師も科学技術の教師も共に社会への有用性を証明することができる分野である。教師が高めることのできる専門職的水準については、それは教師に与えられる余暇の量と教師による余暇の利用の仕方にかかっている。

文明の発達過程にある人間が、はじめて意図的、体系的な研究 (research) によって人間の知識の範囲の拡大に意識的に取りかかって以来、もしも大学の教師がその知的な生気を維持し、それを教え子たちに伝えようとするならば、大学教師は随時研究者の仕事にも従事する機会が与えられないといけない、ということが認識されてきた。我々は今では、大学レベルの教師たちに対

してだけでなく、それ以下のレベルの教師たちに対しても、このような機会を与えることができるだけの、十分な物質的な富を持っている。研究の機会以外のいかなることも、教職の能力と威信と自尊心を増すためにそれ以上のことをすることはできない。我々は研究 (research) について考えるとき、勿論最も広い観点から考えなければならない。自然科学的自然の研究の分野においては、望遠鏡は顕微鏡と同じくらい有益で立派な器械であるという主張に反対する人はだれもないであろう。人文科学の分野においては、最近、顕微鏡使用者的研究者が「研究」(research) という呼び名の独占を彼等独自の研究方法のために主張し、その名称を彼等の兄弟たる望遠鏡使用者的研究者に拒否する傾向がある。しかし、ニュートンのような学者やアインシュタインのような学者も、以前に知られていなかった惑星や星雲を発見した彼等の仲間の科学者たちと同様に、宇宙に関する我々の知識と理解を増大するのに貢献したということは、たしかに明白である。なおまた、この自明の理は、自然科学と同様に人文科学にも当てはまるということも明白である。

研究は、どのような種類のものであれ、教育に役立つ。なぜならそれは、研究者・教師が自分自身に強く求め、教え子に要求する正確と徹底の標準を示すからである。しかしここにおいても、以前にしばしばそうであったように、我々は人間精神の限界によって課せられる問題に連れ戻される。たとえ正規の教育が生涯続くものになるべきであっても、一人の人が一生涯において、綿密で同時に包括的になっていく教育をいかにして受けてわがものにすることができようか。我々は、「一つの世界」になり、なお知的水準においては科学的なものになった世界において、この二つの条件（綿密さと包括性）のどちらをもなしですませるわけにはいかない。恐らく解決法は、だれもが——生徒も先生も、研究者も「実務的な」男女も、等しく——同時に二つの知的な次元で活動することであろう。

だれもが、成層圏を飛ぶジェット機から一瞥する半径が数百マイルにわたる鳥瞰図を一目で見る必要がある。まただれもが、何千フィートという深い地中まで見る虫瞰図を一目で見る必要がある。虫瞰図は、石油試掘者のドリルが地中深く穴を掘って調査するときに、ドリルによって地表に出される連続する地層を精査し、一瞥できるものである。ところが、一人の人間の能力は、狭い範囲に限定されている。それは地球の全表面を詳しく調査することも、地球の内部を中心まで精査することも、成し遂げることは決してできない。しかしながら、少なくとも、一人の人間精神はこれらの知的探求のうち、どちらか一つだけに範囲を限定する必要はない。人は両方を試してみることができるのであり、このような知的な包容性が一般教養教育 (liberal education) であろう。我が学生たちに、人間の人間以前の祖先たちが初めて人間になって以来の地球の全表面の全人類の歴史を概観させようではないか。しかし同時に、彼等にどこか特定の地域において短命だった部族又は教区民の歴史を精細に調査もさせよう。彼等に彼等の母国語でない言語を用いている隣国の人たちと話が通じ合うように学習させようではないか。しかし同時に、どれか特定の言語の構造やだれか特定の詩人の技法を詳細に修得させようではないか。教育問題に対するこの二元的な取り組み方は、我々が今日歴史の急流によって運びこまれつつある巨大で複雑な新世

界において、我々がとることのできる最も有望な方法であるように思われる。